

# 「機能台帳」を備えよう

㈱アルティスタ人材開発研究所 代表 玄 間 千 映 子

先日、竹中大工道具館という大工道具の博物館に行ってきた。展示によると昭和18年頃の日本では、本格的な建物を作るのに必要だった大工道具は179点、安普請でも72点はあったらしい。それだけの道具の扱い方を、親方はどうやって弟子に伝えたかといえば、文字通り「背中」で伝えていた。道具を使えば手足も動く。そうならば背中の筋肉も動く。道具によって異なる姿勢、異なる力の入れ具合が「背中の様子」に表れる。弟子は親方の背中に表れる筋肉の動きで、その道具を操る時のコツといったものを覚えていった。

今日の道具の課題は、存在がデジタル化していることにあり、道具がデジタル化したことで、日本の職場は3つの課題を背負い込んでしまっている。1つめは道具を使うことで対象物に生じる変化に合わせた手加減が難しくなるということ。2つめはアナログ時の道具がいくつも合体して1つの道具となってしまうというかもしれないということ。3つめは画面を操作するだけで動かすなど、手足の動きがそれほど大きくならな

いことがあること。すでに、「背中」で伝えることには限界があるということだ。道具は、働きの効率を上げるために職場に登場しているものだ。道具がアナログからデジタルに変わったのなら、その道具を使いこなせるような対策が必要だ。その対策として、道具の機能を一覧できる「機能台帳」の備え付けをお勧めする。台帳が扱う道具はアナログやデジタルの区別はない。形状として、道具の形が視認できるものは道具名、CADのよ

うなシステム等の場合にはプログラム名やデータ名を道具として扱う。そして台帳に記すのは、それぞれの道具の基本機能とその操り方。使い方は操作マニュアルや手引きで、すでに視認できるようにになっているだろう。しかし、その道具を使いこなすコツ、仕上りをよくするため

にアナログの時に行っていた手加減のような操作は、作業担当者にとって埋もれてしまっているのではないか。近頃の材料は規格で納品されてくる。しかし規格で納品されていても、厳密に言えば規格には幅があり、まったく同じものではないと意識しておくところに品質を維持するコツがある。それは最終段階の製品に至る途中において対応することしかないので、道具がデジタルに代わり、その対応の取り方が周知されずにいくというのでは、成果は上がりにくい。組織の活動は、組織が与えた道具を使うことで行われているものだが、その道具に備わっている機能と

いう情報は極めて安定している。もし組織の活動に課題が生じたら、どの道具の機能の活用に課題があるのかにたどり着ければ、課題となっている活動に目星を付けることも容易になるというものだ。台帳化はなかなか大変に思うかもしれない。だが社員教育を兼ね、分担してしまえばよいのである。

### 【筆者紹介】

玄間千映子（げんま・ちえこ）



㈱アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大學卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。現在、信州大学のコーディネーター兼技術アドバイザー他、団体役員などを併任。著書に『朗働の時代』『ジヨブ・ディスタリプション 一問一答』『リストラ無用の会社革命』など。

